

住持及び関係者墓地から石積基壇を望む



石積基壇と石造物



地蔵堂（左）・薬師堂（右）・石積基壇（奥）

序

島根県と大田市は、平成9年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っています。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところです。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでおり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、令和2年度に実施した、仁摩町大国に所在する浄土宗の古刹、^{やすくに}
^{さんこんこうじ}保國山金皇寺における石造物調査の成果を報告するものです。

今回の調査では、石見銀山遺跡で石塔が本格的に造立されるよりも古い15世紀から16世紀の石造物のほか、羅漢寺五百羅漢の製作に関わった石工の名前が刻まれた江戸時代中期の石造物などを確認することができました。これらの調査成果は石見銀山とその周辺地域における歴史や信仰のあり方を物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

令和3年3月

島根県教育委員会

教育長 新田英夫

例　　言

1. 本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2. 調査した場所は以下のとおりである。

中根山金冠寺 大田市仁摩町大國608外

3. 調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査整備活用委員会

太田洋子（熊谷家住宅　家の女たち代表）

大矢敬子（島根県国民保険団体連合会 常務理事）

川口 純（DOWAホールディングス株式会社 執行役員）

莉谷勇雅（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会 委員）

黒田乃生（筑波大学大学院 教授）

佐々木愛（島根大学法文学部 教授）

田辺征夫（（公益財團法人）元興寺文化財研究所 所長）

津村眞輝子（（公益財團法人）古代オリエント博物館 研究部長）

内藤ユミイザベル（日本イコモス国内委員会 理事）

仲野義文（石見銀山資料館 館長）

中村哲郎（中村ブレイス株式会社 専務）

松村恵司（奈良文化財研究所 所長）

事務局（島根県教育委員会文化財課）

令和2年度

萩 雅人（文化財課長） 清山真理子（世界遺産室長）

今岡一三（同企画幹）

梶谷美鈴（同企画員） 間野大丞（同主席研究員）

伊藤徳広（同専門研究員）

伊藤大貴（同研究員） 清水佳那子（同会計年度任用職員）

石造物調査指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）

池上 悟（立正大学 教授）

佐藤亜聖（公益財團法人元興寺文化財研究所 総括研究員）

西尾克己（松江市歴史まちづくり部松江城調査研究室 松江市史松江城部会長）

中村唯史（三瓶自然館 企画情報課調整幹）

調査参加者

(島根県教育委員会)　間野大丞、伊藤徳広、伊藤大貴、清水佳那子
(大田市教育委員会)　中田健一（石見銀山課　課長補佐）、山手貴生（同主任）、
矢部俊一（同主任）
新川　隆（同会計年度任用職員）、尾村　勝（同会計年度任用職員）

4. 調査に際して、下記の方々から御協力、御助言をいただいた。記して謝意を表したい。
大谷久夫（金皇寺檀家総代）、岡田　隆（同）、黒瀬和則、林 啓碩（西往寺住職）
5. 実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597-3）において保管している。
6. 本書の執筆・編集は間野、伊藤徳広、伊藤大貴が行った。

本文目次

第1章 調査の目的・対象・経緯	1
第1節 調査の目的	1
第2節 調査の対象	1
第3節 調査の経緯	1
第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史	4
第1節 石見銀山の位置と地質学的背景	4
第2節 石見銀山の歴史的背景	4
第3節 金皇寺の位置と歴史的環境	6
第3章 金皇寺の調査	8
第1節 金皇寺の概要	8
第2節 調査の経過	8
第3節 調査の方法	10
第4節 石造物の概要	10
第5節 石造物の様相	12
第6節 総括	13

挿図目次

第1図 石見銀山遺跡全体図	5
第2図 金皇寺位置図	7
第3図 金皇寺配置図	9
第4図 金皇寺 石造物分布図	15
第5図 金皇寺 石造物実測図（1）	16
第6図 金皇寺 石造物実測図（2）	17
第7図 金皇寺 石造物実測図（3）	18
第8図 金皇寺 石造物実測図（4）	19
第9図 金皇寺 石造物拓影（1）	20
第10図 金皇寺 石造物拓影（2）	21
第11図 金皇寺 石造物拓影（3）	22
第12図 金皇寺 石造物拓影（4）	23
第13図 金皇寺 石造物拓影（5）	24

表 目 次

第1表 金皇寺石積基壇と周辺の石造物一覧表	25
第2表 金皇寺地蔵堂の石造物一覧表	27
第3表 金皇寺住持墓地の石造物一覧表	28

写真図版目次

- カラー図版1 住持及び関係者墓地から石積基壇を望む
カラー図版2 石積基壇と石造物
　　地蔵堂（左）・薬師堂（右）・石積基壇（奥）

- 図版1 金皇寺本堂
　　薬師堂
図版2 地蔵堂と住持及び関係者墓地
　　石積基壇から住持及び関係者墓地を望む
図版3 薬師堂裏 石造物散布状況
　　住持及び関係者墓地（1）
　　住持及び関係者墓地（2）
図版4 金皇寺 石造物（1）
図版5 金皇寺 石造物（2）
図版6 金皇寺 石造物（3）
図版7 金皇寺 石造物（4）
図版8 金皇寺 石造物（5）
図版9 金皇寺 石造物（6）
図版10 金皇寺 石造物（7）
　　金皇寺石造物調査状況等

第1章 調査の目的・対象・経緯

第1節 調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭）、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や構造といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第2節 調査の対象

一概に石造物といつても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことがあるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の4つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第3節 調査の経緯

石造物調査（墓石）は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成9・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングに注意し、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を抑えるため、紀年銘を持つ墓石の調査を重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の3つの調査を総合的に行うこととなつた。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るために分布調査。

②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら3つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵光寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22~23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓II・III・IVの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24~25年度の落石防護柵設置予定地に本經寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、柄畠谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区的墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓I、墓II東、墓III東、墓IV、墓Vの悉皆調査を行った。

また、柄畠谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

平成28年度は、前年度に引き続いて昆布山谷地区の妙本寺上墓地を調査対象とし、群中でも最も古く見られていたA地点について悉皆調査を実施した。

平成29年度も引き続き妙本寺上墓地のB、C、D、F、H地点の調査を行い、3年間にわたる妙本寺上墓地の調査が完了した。

平成30年度は妙本寺上墓地の北西側に位置する龍源寺間歩上墓地の調査を実施した。約250基以上の石造物が確認されたため、令和元年度も継続して調査を実施した。

令和2年度からは、これまでの四半世紀におよぶ調査成果を総括する作業に着手している。作業のひとつに石造物の編年がある。本遺跡では1570年代から石塔の造立が始まっているが、周辺地域では、さらに古い14~16世紀前半にかけての在地産石塔が確認されている。本遺跡の石塔を在地産石塔の変遷のなかに位置づける必要がある。この課題を明らかにするため、既往の調査で15~16世紀代の石塔を確認していた金皇寺（仁摩町大国）と温泉津町湯里の石造物について、調査を実施した。

[参考文献]

- 1 島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』
- 2 島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」「石見銀山」第3分冊
- 3 島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」「石見銀山」第6分冊
- 4 温泉津町教育委員会1999『1999 温泉津』
- 5 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1—妙正寺一』
- 6 島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2—龍昌寺跡一』
- 7 島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3—安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外一』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4—長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地(河島家・宗岡家)一』
- 9 島根県教育委員会2004『石見銀山街道一柄浦・温泉津沖泊道調査報告書一』
- 10 島根県教育委員会2005『石見銀山街道一柄浦・沖泊集落調査報告一』
- 11 島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5—分布調査と墓石調査の成果一』
- 12 島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6—温泉津地区恵応寺墓所一』
- 13 島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1)一』
- 14 島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8—温泉津地区的石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2)一』
- 15 島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9—西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地一』
- 16 大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区 保存対策調査報告書(補訂版)』
- 17 島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10—金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物一』
- 18 島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11—槇葉寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区一』
- 19 島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12—仙ノ山石銀地区墓IIIの調査一』
- 20 島根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13—本経寺墓地の調査一』
- 21 島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14—柄畠谷地区字甚光院の石造物調査一』
- 22 島根県教育委員会2014『石見銀山一大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書一【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』
- 23 島根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15—石船地区墓I・墓II東・墓III東・墓IV・墓Vの石造物調査—一柄畠谷地区字甚光院の石造物調査一』
- 24 島根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山遺跡石造物調査報告書16—昆布山谷地区妙本寺上墓地E地点・G地点・虎岸寺跡の石造物調査一』
- 25 島根県教育委員会・大田市教育委員会2017『石見銀山遺跡石造物調査報告書17—昆布山谷地区妙本寺上墓地A地点の石造物調査一』
- 26 島根県教育委員会・大田市教育委員会2019『石見銀山遺跡石造物調査報告書18—昆布山谷地区妙本寺上墓地B・C・D・F・H地点の石造物調査一』
- 27 島根県教育委員会・大田市教育委員会2020『石見銀山遺跡石造物調査報告書19—柄畠谷地区龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地の石造物調査一』
- 28 守岡正司2011『石見銀山遺跡石造物調査の概要』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 29 西尾克己・東山信治2016『大田市内の中世石造物』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6』 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 30 島根県教育委員会2019『松林寺遺跡』『垂水遺跡・松林寺遺跡・庵寺石塔群』

第2章 石見銀山遺跡の位置と歴史

第1節 石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180km余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の3国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床型の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という2つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鐵鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ピスマスなどが含まれる。

第2節 石見銀山の歴史的背景

平安時代末期に、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な莊園が成立し、中世には石見銀山周辺に多くの莊園、国衙領が成立する。

南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見國守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永8（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると

大内義興が石見一円の守護権を回復した。

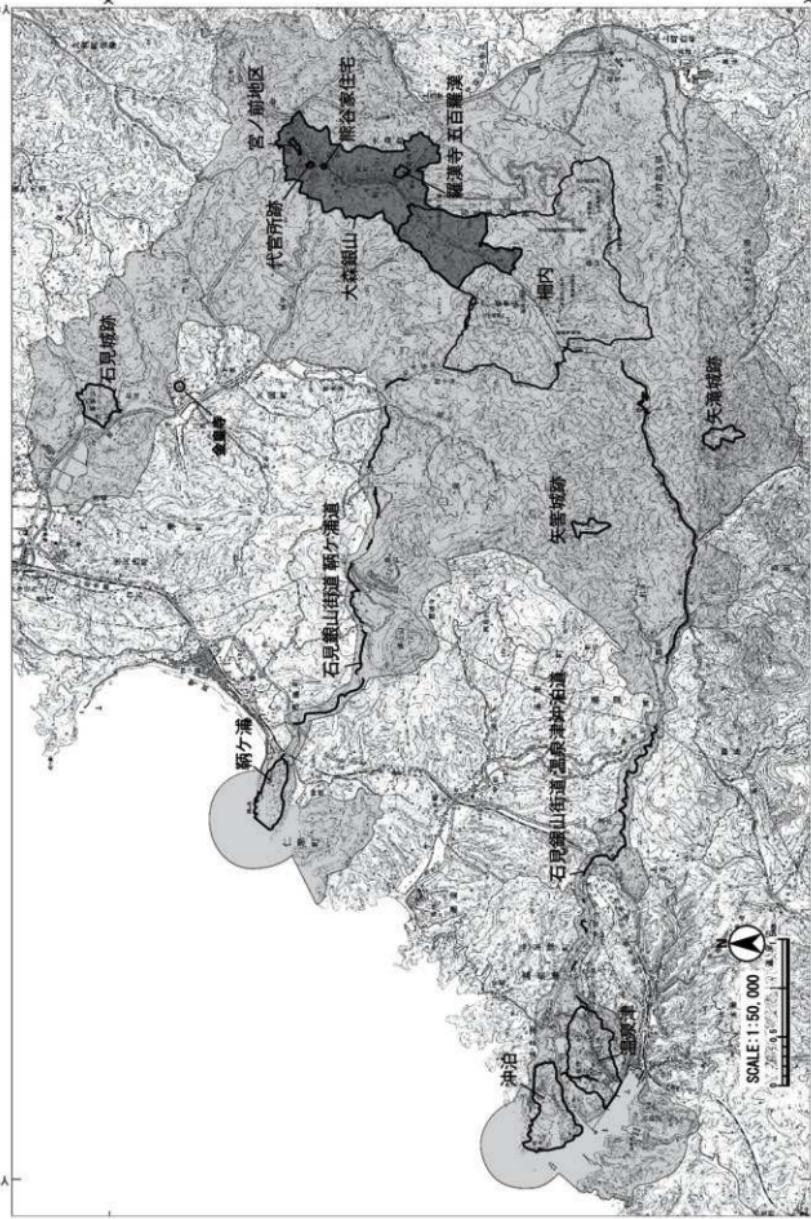
戦国期の大永7（1527）年に石見銀山が発見される（大森町清水寺の寛永2（1625）年の本堂再建棟札）。『銀山旧記』には発見者が博多の有力商人神屋寿禎と記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文2（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある邇摩郡は、周辺の安濃郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期は、初代奉行、大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎える、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5t）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約300貫（約1t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な経営が続かれたが、明治19（1887）年に藤田組が経営をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要商品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り盛んをみた。しかし、第1次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。

第3節 金皇寺の位置と歴史的環境

保国山金皇寺は大田市仁摩町大國608番地に所



第1図 石見銀山遺跡全体図

在する。仁摩町大國地区は、石見銀山の中心部である大森町の西に接し、蛇行しながら日本海へ注ぐ潮川の中流部に位置する。金皇寺は潮川右岸の谷あいにはいった「中市」に所在している。潮川は山間を抜けた河口近くに仁万平野をつくり、河口部が仁万港として利用されている。天正15(1587)年、細川幽斎が記した『九州道の記』の行程では、石見銀山に向かうため仁万湊に上陸している。仁万湊は石見銀山にもっとも近い港であり、当時から潮川沿いに石見銀山へ至る通行容易な街道も存在していたことがわかる。

潮川下流域では、平安時代末から鎌倉時代の遺跡に白石遺跡がある。多数の掘立柱建物のほか、白磁・青磁などの貿易陶磁が出土している。ほかにも潮川左岸に広がる五丁台地には、古屋敷遺跡、木ヶ坪遺跡、孫四田遺跡、大月遺跡、コラスミ遺跡、京円原遺跡、清石遺跡など、中世の遺跡が集中している。多くの遺跡からは11世紀後半から12世紀の中国製白磁、15世紀から16世紀の中国製青磁や白磁、青花が確認されている。このころ貿易拠点としての港が機能していたものと考えられている。また、平野の最奥部に位置する大國地頭所遺跡からは、中世の大型柱穴や柱根、区画溝を伴う建物跡が確認され、有力者の館跡と考えられている。この遺跡の南東に、世界遺産の構成資産である石見城跡、対岸には大國城跡が位置している。

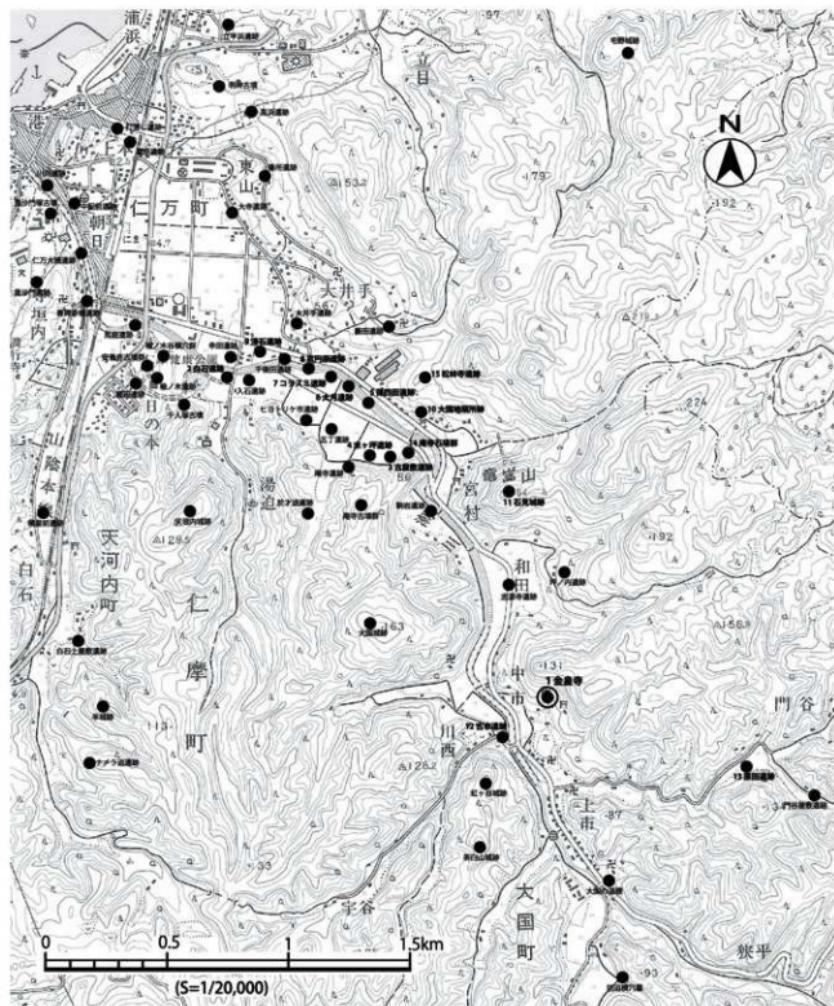
潮川上中流域の調査事例は少ないが、古市遺跡と原田遺跡が知られている。原田遺跡は仁万平野から石見銀山へ至る街道「仁万ルート」沿いに位置し、銀山開発初期段階に相当する16世紀代の陶磁器が出土している。原田遺跡と下流域のコラスミ遺跡からは防長系の瓦質擂鉢も出土しており、大内氏との関連も指摘されている。

石造物の様相については、分布調査がされていないため不明な点が多い。わずかながら一般国道9号仁摩道路の建設に伴って調査されたものがある。潮川左岸に位置する庵寺石塔群は、元禄2(1688)年銘を有する大型の宝篋印塔と正徳5

(1715)年銘の方柱状石塔が岩窟に納められている。組合せ宝篋印塔は銀山最盛期にあたる17世紀代のもので、保存状態も良好である。対岸に位置する松林寺遺跡の発掘調査では、16世紀代と考えられる白色凝灰岩製宝篋印塔が確認されている。松林寺(庵)には江戸時代から明治時代の墓地があり、一石宝篋印塔も一基確認されている。このほか調査はされていないが、金皇寺の所在する中市地区で、高野一族の墓と伝えられる石塔群が古くから知られている。

【参考文献】

- 1 千手慶一・田中貞徳1972『大國文化観光誌 ふるさと十二勝』
- 2 大庭康時2011「博多と石見銀山一港の視点から」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 3 大国まちづくりセンター・大国の史跡めぐりの会2012『大国の史跡めぐり』
- 4 新川隆2013『海磁器からみた石見銀山周辺地域-仁摩町出土資料を中心に-』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究3』島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 5 岩橋孝典2015「16世紀後半における山陰地域水上交通の一断面-島津家久と細川幽斎の旅を題材として-」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター
- 6 島根県教育委員会2018『大國地頭所遺跡』
- 7 島根県教育委員会2019『垂水遺跡・松林寺遺跡・庵寺石塔群』
- 8 島根県教育委員会・大田市教育委員会2020『石見銀山遺跡石造物調査報告書19-楊畠谷地区龍源寺間歩上墓地・妙像寺墓地の石造物調査』



- 1金皇寺 2白石遺跡 3古屋敷遺跡 4末ヶ坪遺跡 5孫四田遺跡 6大月遺跡 7コタヌミ遺跡
8京円原遺跡 9清石遺跡 10大国地頭所遺跡 11石見城跡 12古市遺跡 13原田遺跡 14庵寺石塔群
15松林寺遺跡

第2図 金皇寺位置図

第3章 金皇寺の調査

第1節 金皇寺の概要

金皇寺は大田市仁摩町大國に所在した浄土宗寺院である。山号は保国山。これとあわせて養寿院の院号を持っていた。

金皇寺に伝わる由緒によれば、もとは大國の冠地区にあり、鳥羽山光明寺（真言宗）と呼ばれていたが、永禄年間に一時に衰退していた。その後、元亀元（1570）年に石見銀山の極楽寺住持・良休が開山となる形で現在地へ移転、再興されて浄土宗寺院になったという。当時、極楽寺の良休は石見銀山を起点として温泉津・仁万方面に教線を拡大しており、末寺化された金皇寺は仁万方面に進出するための最前線として位置付けられた可能性が高い。

金皇寺に伝わる中世文書によれば、天正9（1581）年12月に吉川元春から寺領の安堵を受けしており、同時に吉川氏奉行人による寺領打渡が行われた。それによると末寺の般若院とあわせて約17石の寺領を所有していたことがわかる。さらに文禄4（1595）年には毛利氏の石見銀山奉行・佐世元嘉の配下として石見銀山支配に関与した南湘院から寺領約5石を打渡されている。その後、江戸時代にわたって金皇寺の寺領は5石のまま推移している。

金皇寺に伝來した古文書の多くは18世紀以降のものであり、17世紀代の様相は不明であるが、石見銀山・極楽寺の末寺として展開したと推測される。金皇寺の古文書から断片的に読み取れる情報をもとにすると、金皇寺の檀家は大國村だけでなく、大森町や銀山町にも存在したようである。また、金皇寺の歴代住職は仁万の西往寺や銀山の極楽寺・大森の勝源寺などから迎い入れられていた。このように中近世の金皇寺は石見銀山と密接に結びつくことで展開していたといえるだろう。

その後、寛政3（1791）年には京都の清淨華院の直末となり、近代に至った。

金皇寺を支えた檀家については、前述のとおり

石見銀山にも存在したが、最も有力な檀家は大國村の清水家（屋号「松屋」）であった。清水家は大國村の庄屋もつめた家柄であった。金皇寺の造営事業や什物などの記録を見ると、全面的に清水家が資金援助や寄進を行っている。

金皇寺の境内には、本堂のほか、庫裏と薬師堂が残っている。地蔵堂と鐘楼、山門については宗教法人解散の手続きに伴い解体された。このうち薬師堂は別名を般若院といい、もとは鳥羽山光明寺にあった寺庵であるという。薬師堂に安置されていた薬師如来も光明寺から移した仏像とされる。

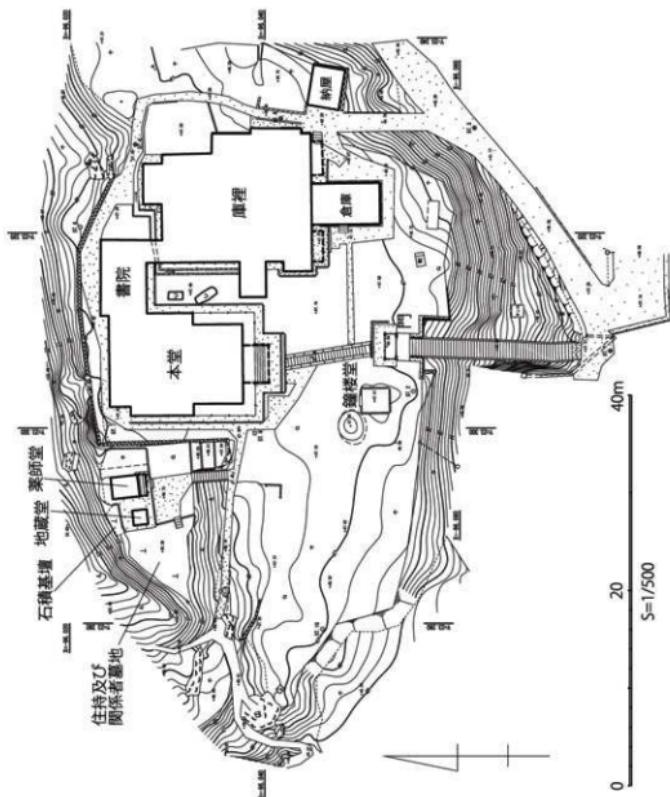
このほか、金皇寺には宝生庵（中世には宝生寺と呼称）、臨光庵という末寺も存在した。宝生庵は元亀3（1572）年に毛利輝元の安堵状が発給されており、中世に遡る寺庵であった。一方で臨光庵は近代の記録によれば、延享年間に創建されたとあり、少なくとも昭和17（1942）年までは存在していた。

なお、金皇寺文書の概要や中世文書の詳細については別稿（伊藤大貴「史料紹介 金皇寺文書所収の中世文書について」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』11号、2021年）を参照されたい。

第2節 調査の経過

金皇寺の石造物は、テーマ別調査研究「最盛期石見銀山の復元研究」において、大庭康時客員研究員（当時）がはじめて所在確認したものである（大庭2011）。確認された中世墓塔について、平成24（2012）年10月に、中村唯史氏（三瓶自然館）による石材鑑定をおこない、ディサイトと白色凝灰岩の2種あることが確認された。

令和2（2020）年度、総括報告書作成のための補遺調査として、金皇寺の調査を実施することとした。調査はおもに中世墓塔と近世墓標・石仏等を対象とし、5月25日から8月31日まで、断続的に実施した。



第3図 金皇寺配置図

調査期間中に、宗教法人解散の手続きに伴う墓地改葬と地蔵堂解体が10月5日から行われることとなり、11月にかけて追加調査を実施した。

調査指導会は3回開催した。7月22日と12月1日に、中村唯史氏（三瓶自然館）から石材に関する指導を受けた。11月5日には、池上悟氏（立正大学）ならびに佐藤亜聖氏（元興寺文化財研究所）、西尾克己氏（テーマ研究客員研究員）から石造物の年代等について調査指導を受けている。

また10月に行われた寺院財産処分の際、偶然にも古文書や掛け軸・仏画・棟札などが発見された。その後、古文書などは大田市教育委員会に寄贈され、現在は石見銀山世界遺産センターにて保管されている。

第3節 調査の方法

分布調査で確認した、すべての墓塔や墓標について、石造物調査カードを作成し、写真撮影を行った。中世の墓塔はすべて実物の1/5で実測した。近世・近代の石造物は一部を実測し、残りは種類・銘文など必要事項を記入している。

石積基壇の石造物と地蔵堂・住持墓地の中世墓塔にはアラビア数字で番号を付けた。そのほかの住持墓地の石造物はアルファベット大文字、地蔵堂内の石造物はアルファベット小文字を付けた。

石造物の分布図はS=1/50、境内の配置図は外注によりS=1/200で作成している。

第4節 石造物の概要

（1）石造物の分布（第3・4図）

境内地は、東西にのびる丘陵南斜面に広がる。南から北にのびる石段をのぼると山門が開き、左に鐘楼堂がある。正面に本堂、その右に庫裡が建つ。本堂向かって左（西）の一段高い平坦地に、薬師堂と地蔵堂が並び、南面して建つ¹⁾。この地蔵堂の西に、住持関係者の墓地が築かれている。建造物のうち地蔵堂と鐘楼、山門は解体されている。

石造物は、薬師堂および地蔵堂の背後と地蔵堂

内、住持関係墓所の3地点に分布する。

（2）各地点の様相

薬師堂裏の石造物（第5図・第9図）

1～3は妻壁沿いに並べてあり、28～29は斜面裾に置かれている。

3は宝篋印塔屋根である。上4段、下2段の段形をもつ。軒は厚い。隅飾突起は、単孤で外反する。側面の文様は、欠損のため不明である。

1は宝篋印塔基礎である。反花式で側面に三葉、隅に一葉の蓮弁を配する。

2は地蔵菩薩の基礎と思われる。「宝曆十三年
釈淨円 二月十六日 俗名俊定」の銘文がある。

28は墓標の台座と思われる。反花座をもつ。29は灯籠の屋根である。

石積基壇の石造物（第5図～第7図・第9図・第11図）

石積基壇は地蔵堂・薬師堂の1.5m背後に築かれている。規模は、幅3.0m、奥行き1.2m、高さ55cmである。右端には宝篋印塔部材が積み上げられ、その左に地蔵菩薩3基が並べてある。これらの周囲に、宝篋印塔の部材などが置かれている。地蔵菩薩の背後には近世墓標があり、その近くに横倒しになった無縫塔などが散乱している。

4・5・18は宝篋印塔の相輪である。4の上請花は、同じ大きさの柳葉状をした単弁のみで構成する。5は伏鉢にあたる部位に、丸みをもった大きな単弁と小間弁を配した反花を飾る。反花の上には突帶を3条刻んでいる。18の宝珠は球形ではなく、ややいびつである。上請花は、大きな単弁5葉に間弁を配する。

9・10は宝篋印塔の屋根である。9は軒上5段、下2段の段形をつくる。隅飾突起は二孤である。側面は二孤で、外形に沿って幅0.5cmの線彫りで表現している。10は軒上4段、下1段の段形をつくる。隅飾突起は単孤で、側面は底辺以外を彫りくぼめ、二孤にしている。

37は宝篋印塔の塔身と思われる。下面是凸凹し

ている。

6・36・76は宝篋印塔の基礎である。基壇の右端にあり、8と30-1・30-2を組み合わせた基壇上に置かれている。6は反花式で、中央と隅に大きな単弁を配し、間弁を添えている。側面は四面とも輪郭を巻く。36は右側四分の一が二次的に割り取られている。反花式で中央と隅に覆輪付きの複弁を置き、間弁をさむ。格狭間は花頭曲線状にもみえるが、輪郭の上辺を直線に仕上げていないためかもしれない。左側面は粗い加工痕を残したまま、平滑に仕上げていない。背面にあたるのか、あるいは二次的に削られている可能性がある。現在の背面は埋まっており、観察できない。7は上端を大きく面取りしている。側面は輪郭を巻き、格狭間を表現する。格狭間は四面とも輪郭上線の一部から花頭曲線まで、二次的に削られている。

20・23・32は無縫塔である。20は19のとなりに横倒しになって埋まっており、先端のみ見えている。23は12の後ろに横倒しになって埋まっており、先端のみ見える。32は上部がほとんど埋まっている。

24の円頂方柱墓標と25の台座が組み立ててある。24は、幅と厚さが同じで頭部を丸くしている。正面は位牌型に枠取りし、下端に蓮座を陰刻する。右面に「宝曆十二壬午」、左面に「八月十日俗名〇〇貞九郎」の銘文がある。25は西面に「明和八辛卯」「信□」「梅月妙香」「正月十五□」の銘文がある。24が宝曆12(1762)年、25が明和8年(1771)に造立されており、本来の組み合わせでないことがわかる。

11~14・22は地蔵菩薩である。前述の25も地蔵の台座と思われる。

14-1~3は坐像で、左手に宝珠を持つ。大きな覆輪付き単弁6葉からなる蓮座にのる。蓮座と下の台座は、下面を大きく彫り込んでいる。台座は三面に銘文がある。南面(ほんらいの正面)「□□(和)三丙戌年」「カ(梵字)□□(界か)萬靈」「十月日」と刻まれている。西面には「施主」

「清水治郎右衛門」「并施入之輩」「石工」「傳六作」と刻まれている。東面は三行以上にわたって、銘文が刻まれていたようだが、剥落により下端の「代」「□」「□」が確認できるのみである。明和3(1766)年に三界萬靈を目的として造立されたことがわかる。

12-1は両手で蓮をもつ。12-2は「宝曆十三年」「□□」「願主当村住人」「四月日」の銘文がある。11-2は坐像で合掌している。11-3は台座で水受けをもつ。13-1は坐像で合掌している。板状をしており、背面は粗く加工痕を残したままである。13-2の台座は、水受けと線香立が作られている。13-1は白色凝灰岩製、13-2は緑色火山礫凝灰岩(福光石)製であり、ほんらいの組合せではない。22は11-1~3の裏にあり、頭を左にして横倒しになっている。13-1と同形態である。

17は地蔵の立像である。基壇の最前列に置かれている。単弁6葉からなる蓮座の上にのる。

15の水盤は、13の前に置かれている。

8は長方形の板材である。中央右よりを幅13.0cm×20.0cmの長方形にくりぬいている。

19は台座である。基壇左端にあり、手前にもかって斜めに置かれている。上面は縁を9~10cm残して、中央を粗い加工痕のままとしている。

30-1は幅80.5cm、奥行16.0cmの延石である。30-2はこの奥にあり、幅25.0cm以上、奥行24.5cmの板材が組み合わせてある。

31は板材で、両端を欠失している。

38は台座で、基壇正面の石積みに転用されている。

21は不明部材である。底面は斜めに加工してある。

16の不明部材は、14の右前に置かれている。一面のみ枠取りして、蓮座を飾る。蓮座は中央弁の左右に二葉の蓮弁と蕨手文を表現している。

26、27は形式不明の部材である。26は6・7の裏、27は11の下に置かれている。

地蔵堂の石造物(第8図・第12図・第13図)

手前から3列に並べておさめてある。前列に地蔵菩薩4基（g～j）、中列に同3基（d～f）と笠付方柱型墓標1基（33）、後列に地蔵菩薩3基（a～c）がならぶ。前列のまえ（最前列）に宝篋印塔の相輪1基（34）がある。地蔵菩薩はa～cのみ立像で、ほかは坐像である。中央の地蔵菩薩（立像）hは光背付きである。持物は、hが錫杖をもつ。a～cは、左手に宝珠をもち、右手は別材の錫杖を持てるように作ってある。また最前列には、石見焼製の花生2個と磁器碗1個（「山尾醸」「清酒大連」の文字入り）がおかれている¹⁰⁾。

a～cは坐像・蓮座・基礎を別石で作り、形態も同じであることから、同時期に作られたと考えられる。a・bがほぼ同じ高さで、cは小型である。aは、基礎の正面と左右面に銘文がある。正面「宝暦六丙子天 願六諸衆生 奉造立地蔵大士 往生安樂國 六月日」、右「金皇寺靈場安置敬白」左「□宝生庵住 来善」である。宝暦6（1756）年に造立されたことがわかる。

33は笠付方柱型墓標である。上部に付く笠（35）は住持関係墓所の基壇端に別に置かれている。正面を位牌型に彫り込み、「南無阿弥陀佛 駿圓秀靈」と刻む。その下に蓮座をもつ。蓮弁は中央に蓮蕾をおき、左右上方にのびる2対の蓮弁、下方にのびる1対の蓮弁を陰刻する。蓮蕾のみ深い。下面のほぞは意図的に壊されている。室内に納めやすいように、笠は外し、ほぞを割り取ったものと考えられる。右面に「貞享元子歳十一月六日」、左面に「俗名○○三郎左衛門」、背面に「銀山西向寺九世隨善上人父也」を刻む。貞享元年（1684）に造立されたことがわかる。

34は宝篋印塔の相輪の一部（上請花から九輪）である。上請花にあたる部位は蓮弁の表現はない。九輪は溝彫りで区画している。

住持および関係者の石造物（第8図）

地蔵堂の西側に位置している。石段を上った両側に灯籠2基がある。その正面側と右側に、無縫塔7基、円頂方柱型墓標3基、平頂方柱型墓標2

基、地蔵2基がある。寛政4（1792）年に十二世住職によって歴代上人墓として造立された無縫塔Fがもっとも古い。そのほかは、明治・大正・昭和・平成までの墓標である。燈籠は来待石製で、昭和10（1935）年に大森町住民が寄進したものである。

40～43の宝篋印塔が確認された。40・42・43が相輪の残り、41は屋根である。石材は40・41がデイサイト、42・43は白色凝灰岩である。41の屋根は軒上4段、下2段の段形をつくる。隅脚突起はのべ造りで、単孤である。相輪の連弁配置はそれぞれ異なる。40が覆輪付き複弁に間弁をはさむ。42は同じ大きさの単弁のみ廻らし、43は単弁に小さな間弁をはさむ。

第5節 石造物の様相

石造物は組合せ宝篋印塔、円頂方柱型墓標、平頂方柱型墓標・地蔵菩薩・無縫塔、灯籠、形式不明の墓標・形式不明の部材を確認した。以下、形式別に特徴をまとめる。

（1）組合せ宝篋印塔

使用されている石材は、デイサイトと白色凝灰岩、緑色火山礫凝灰岩（福光石）の3種類がある。

デイサイト製の部材は相輪3点、屋根3点、基礎3点である。このうち屋根9と基礎6が組み合うものと復元できる。のこりの屋根10・41と基礎7・36は法量が合わないことから、別個体と考えられる。白色凝灰岩製は相輪18・34・42・43と屋根3、火山礫凝灰岩製は基礎1のみで、組み合う部材はない。

以上から、すくなくともデイサイト製5基以上と白色凝灰岩製3基以上、緑色火山礫凝灰岩製1基以上が存在したものと推定される。

以下、石材別に形態的特徴と年代的位置づけを整理する。

（a）デイサイト製宝篋印塔の変遷と年代

相輪は直線的な宝珠と蓮弁表現になっている。屋根の隅飾は、二孤から単孤へ変化すると考えられ、9から10、41への変遷が考えられる。

基礎は3点とも側面に輪郭を巻く。大型で格狭間を表現した7・36が古く、6が新しいと思われる。6・7・36とも、これまでの調査例にない以下の特徴をもっている。36は中央と隅に覆輪付き単弁、6は単弁を配置している。7は上端を「刎方座」様にし、側面に格狭間を表現している。

屋根・基礎は形態的特徴から、白色凝灰岩製よりも古く位置づけられる。そのなかでも、基礎7・36は大型で四面に格狭間をもつ特徴から、もっとも古い。年代は6が16世紀代、7・36は15世紀にさかのぼる可能性があるとしておきたい。

(b) 白色凝灰岩製宝篋印塔の特徴と年代

相輪は宝珠と蓮弁が丸みをもち、デイサイトよりも古相を示している。

屋根3は厚い軒とおおきな単孤の隅飾をもつ。軒下に2段の段形を作り出す特徴は、緑色凝灰岩製よりも古相を示す¹⁰⁾。年代は、おおむね16世紀代後半と考えられる。

(c) 緑色火山礫製凝灰岩製宝篋印塔の特徴と年代

基礎1は、龍昌寺跡分類の基礎③類に相当する(島根県・大田市2002)。同寺跡では天正、天正11(1583)年・天正15(1587)年の紀年銘資料が確認されている。本資料も同時期と考えられる。

(2) 近世墓標

円頂方柱型(24)と笠付方柱型(33・35)が1基ずつある。円頂方柱型は、石見銀山遺跡の各宗派墓地において普遍的な墓標形式である(島根県・大田市2005)。また笠付方柱型は数が少なく、寛文2(1662)年から寛政11(1799)年まで、断続的に確認されている。33は貞享元(1684)年に造立されている。石見銀山の柄畠谷地区に所在した西向寺の九世隨善上人の父の墓標である。地蔵堂内に納められているが、本来は別の場所に造立されていたものと考えられる。

(3) 地蔵菩薩・三界萬靈塔

石積基壇の3点と地蔵堂後列左1点に銘文が確認された。年号は宝暦6(1756)年、同13(1763)年と明和3(1766)年、同8(1771)年である。宝暦2(1752)年に薬師堂が現在地に移されたのを契機として、寄進・造立がおこなわれたものと推測される。

14を寄進した清水治郎右衛門は石見八幡宮棟札に名前がある。享保2(1717)年、享保20(1735)年、延享3(1746)年、宝暦11(1761)年の棟札に「頭百姓 清水次郎右衛門」「清水次郎右衛門」の名前があり、同一人と考えられる(島根県ほか1999)。製作した石工の傳六は、福光石工の坪内平七一門である。明和3(1766)年に完成した羅漢寺五百羅漢の製作にも関わっている(鳥谷2005)。明和3(1766)年の熊谷家文書にも名前がみえる(西尾ほか2020)。

13-1・22および地蔵堂内の5体(d~f・i・j)は白色凝灰岩製で、正面のみ整形加工した特徴的な形態をしている。周辺地域で類例を調査し、分布圏を特定する必要がある。

また、地蔵堂の地蔵菩薩(坐像)は、婚礼習俗「地蔵担い」にかかるものである¹¹⁾。仁摩町では、村の若者たちが地蔵を婚礼の際に運び込み、嫁家ではもとの場所に返してもらうために、酒食をふるまうなどしていたようである(仁摩町1972)。この習俗は、大田市内の三瓶川流域や延里、馬路のはか温泉津町でも報告されている(大田市1989・島根県1962・多田1995)。

第6節 総括

(1) 15-16世紀代の中世墓塔

石見銀山遺跡で石塔が本格的に造立される1570年代以前の型式を確認することができた。金皇寺は元亀年間の創建とされる。詳細な年代は今後の課題だが、白色凝灰岩・火山礫凝灰岩製品は形態から当該期に位置づけて矛盾しない。しかし、デイサイト製品のなかには、それよりも古く、15世紀にさかのぼる可能性のあるものもみられる。

同じ特徴をもつデイサイト製の宝篋印塔屋根は、温泉津町湯里に所在する薬王庵跡の石塔群にみられ、同一産地の可能性がある。また、反坂石塔群（江津市都治町）と二枚畳遺跡（同波積町）のデイサイト製品とは特徴が異なっており、生産地・時期の異なる可能性が考えられる（江津市2006・同2014・今岡2002）。今後、デイサイト製品の生産地（石工）と分布圏を特定していく必要がある。

（2）近世墓標・地蔵菩薩

貞享・宝曆・明和年間の銘文資料を確認することができた。33は石見銀山に所在した西向寺住持に関わる墓標であり貴重である。また14は、三界万靈を目的として、頭百姓が施主となり、坪内傳六が製作した経緯がわかる貴重な資料である。地蔵堂aは、金皇寺の末寺である宝生庵の来善によって造立されている。

また、石仏は石材ごとに形態的特徴が異なることもわかった。石材は白色凝灰岩・緑色火山礫凝灰岩・凝灰質砂岩の3種みられる。緑色火山礫凝灰岩は坐像・立像とも肉彫りし、白色凝灰岩製は坐像を正面のみ整形加工、砂岩は光背付きである。緑色火山礫凝灰岩製品は坪内一門の手にかかるものと考えられるが、他の2種について類例を調査していく必要がある。

（3）おわりに

以上、今回の調査を通じて金皇寺創建以前と考えられる15~16世紀の石造物と江戸時代中期の在銘品を確認し、貴重な研究素材を提供することができた。今後、石造物調査が契機となって発見された貴重な文書群・棟札などをふくめて総合的な検討が必要になってくるだろう。

また、本資料はテーマ別調査研究事業のなかで発見し、墓地改葬前に記録をのこすことができた幸運な事例である。今回の経緯は石見銀山と周辺地域における調査の必要性をあらためて浮き彫りにしているといえる。石造物調査についても、世

界遺産地内の分布調査は行っているものの、バッファゾーン及び周辺については不十分な状況である。

今後、石見銀山周辺地域における石造物調査のありかたを検討していく必要があるだろう。

【参考文献】

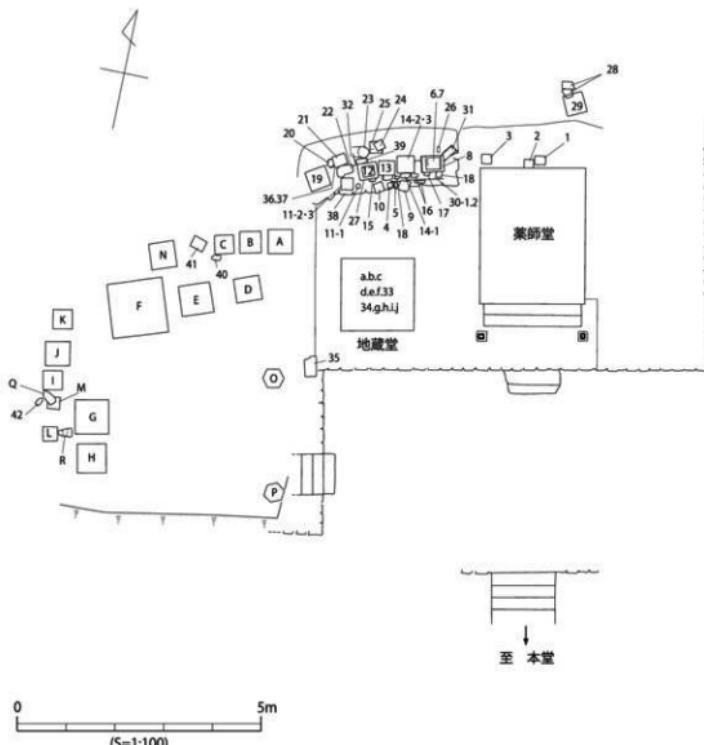
- 今岡稔2002『山陰の石塔二三について－10－』『島根考古学会誌第19集』島根考古学会
大庭康時2011『博多と石見銀山一港の視点から－』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』島根県教育委員会・大田市教育委員会
江津市教育委員会2006『反坂遺跡』
江津市教育委員会2014『二枚畳遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会1962『14 一生の儀礼』『島根県下30地区の民俗－民俗資料緊急基本調査報告書』
島根県教育委員会2019『松林寺遺跡』『垂水遺跡・松林寺遺跡・庵寺石塔群』
島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会1999『補論 糸ヶ浦地域・沖泊地域の棟札』『石見銀山遺跡総合調査報告書第6冊【民俗調査・港湾調査・街道調査編】』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡 石造物調査報告書1－妙正寺跡－』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡 石造物調査報告書2－龍昌寺跡－』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡 石造物調査報告書5－分布調査と墓石調査の成果－』
千手鏡一・田中貞徳1972『大國文化観光誌 ふるさと十二勝』
多田房明1995『民俗編 第4章第2節婚姻』『温泉津町誌下巻』
鳥谷芳雄2005『石見銀山の石造物等にみる石工名』『石見銀山遺跡石造物調査報告書5』島根県教委・大田市教育委員会
西尾克己・東山信治2016『大田市内の中世石造物』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究6』島根県教育委員会・大田市教育委員会
西尾克己・尾村勝・新川隆2020『石見銀山遺跡における石塔の分類と変遷－銀山地区・大森地区を中心として－』『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究10』島根県教育委員会・大田市教育委員会
仁摩町1972『第7編第2章伝承と民俗』『仁摩町誌』
守岡正司2011『石見銀山遺跡石造物調査の概要』『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』島根県教育委員会・大田市教育委員会

注)

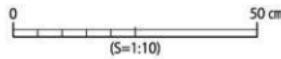
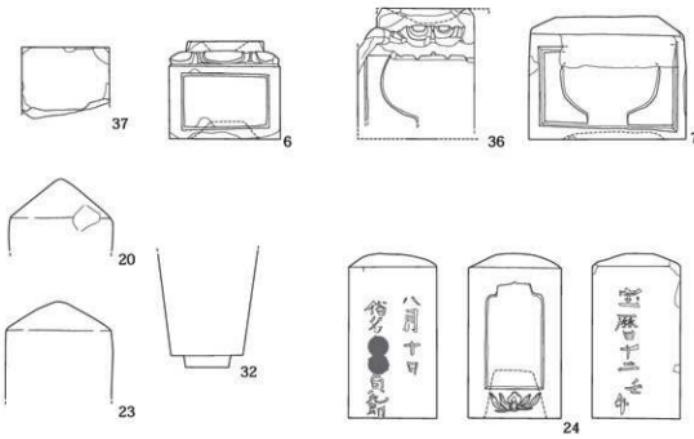
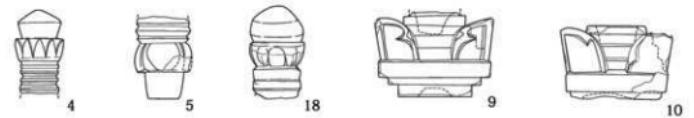
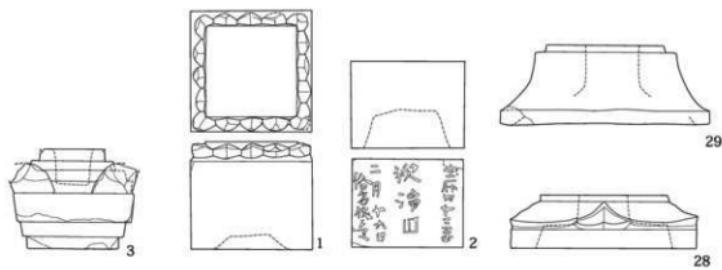
- i 菩提堂は冠地区から移築したもので、地蔵堂は寄進されたものという。
- ii 地蔵堂内に供えられていた耳付きの花生（石見焼）の底面には、「臨光庵什物」「昭和三年七月二十三日 寄付者 上市辻吉太郎」と墨書きされている。臨光庵は、金皇寺末寺で上市大佐谷、現在の大佐橋付近にあったとのことである。
- iii 金皇寺の北西1.1kmに位置する松林寺遺跡で白色凝灰岩製宝鏡印塔の屋根が出土している。この製品は段形が上6

段、下2段である。軒は厚く、外反する。下面（底面）から隅脚侧面（先端）にむけて直線的に外反している。こうした特徴から、同一産地の製品と考えられ、本例より古段階に位置づけられる（鳥根県2019）。

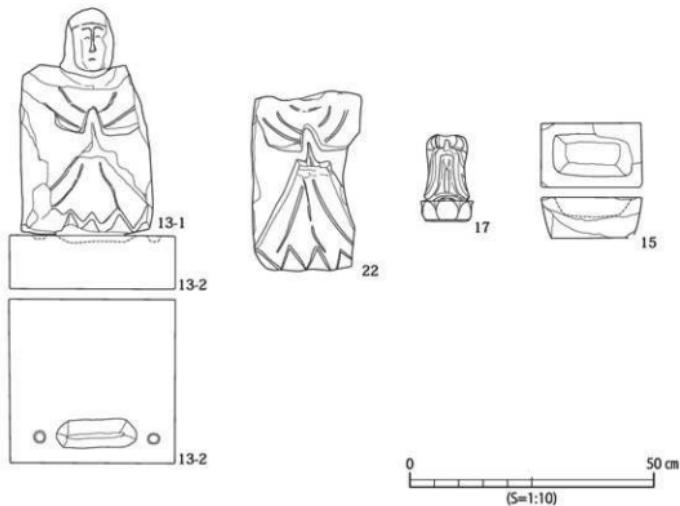
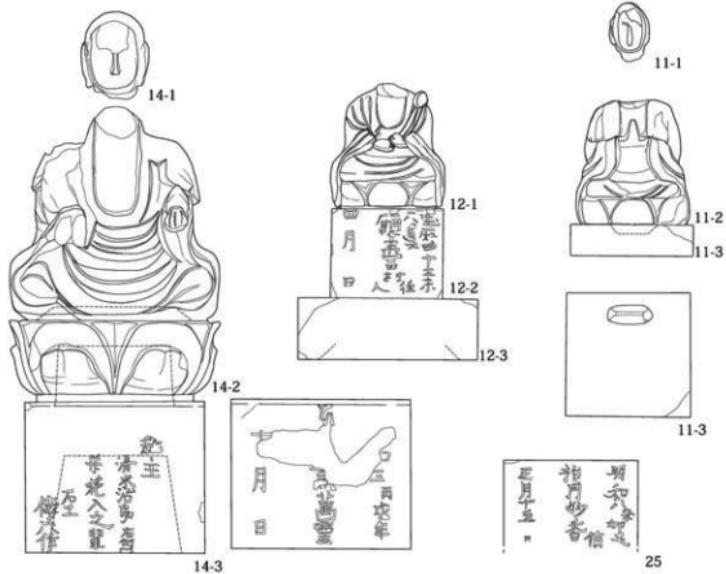
iv 地域住民から地蔵について「嫁が逃げないように婚礼のとき地蔵を運びこんだ。金皇寺の急な石段を登り、地蔵を運ぶのは大変だった」との証言を得ている。



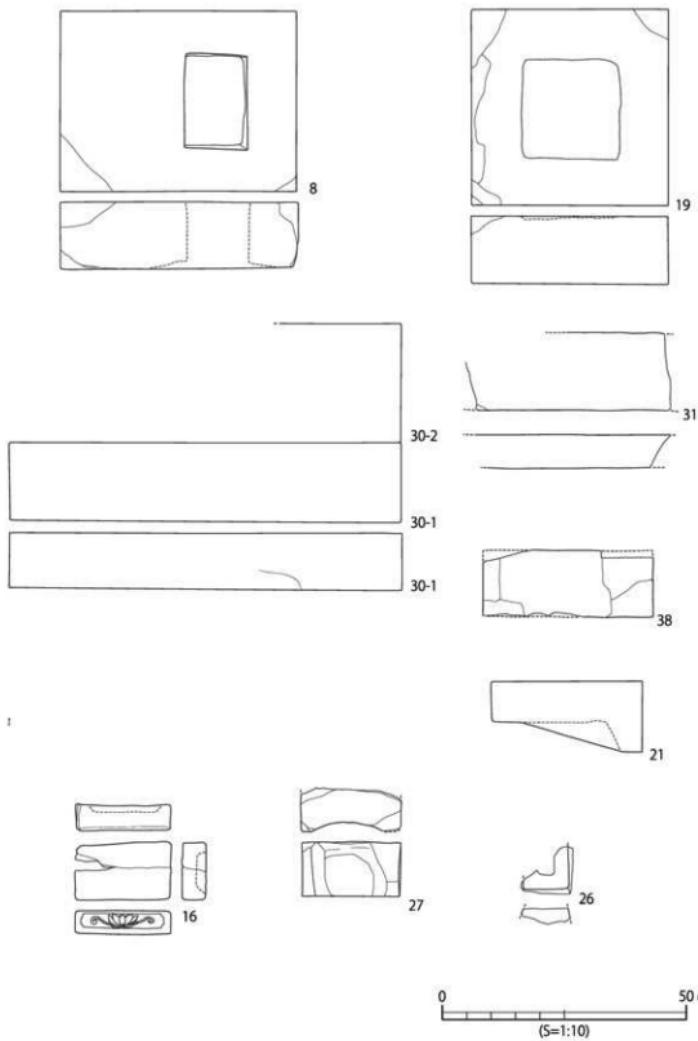
第4図 金皇寺 石造物分布図



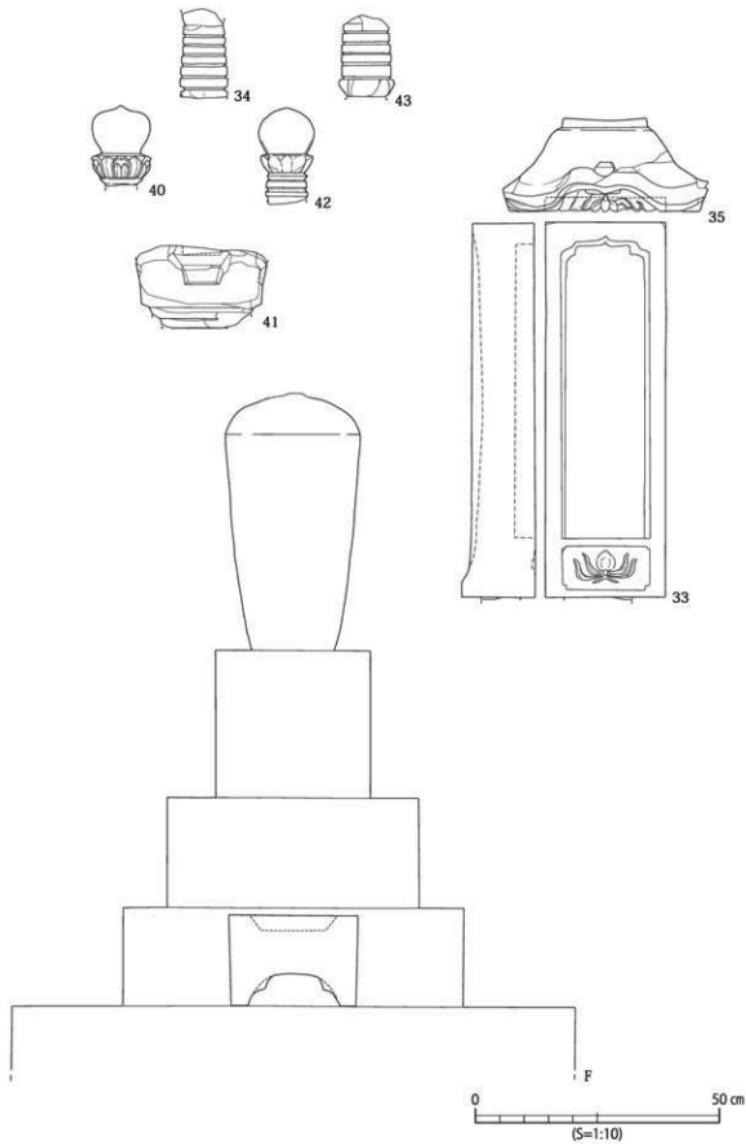
第5図 金皇寺 石造物実測図（1）



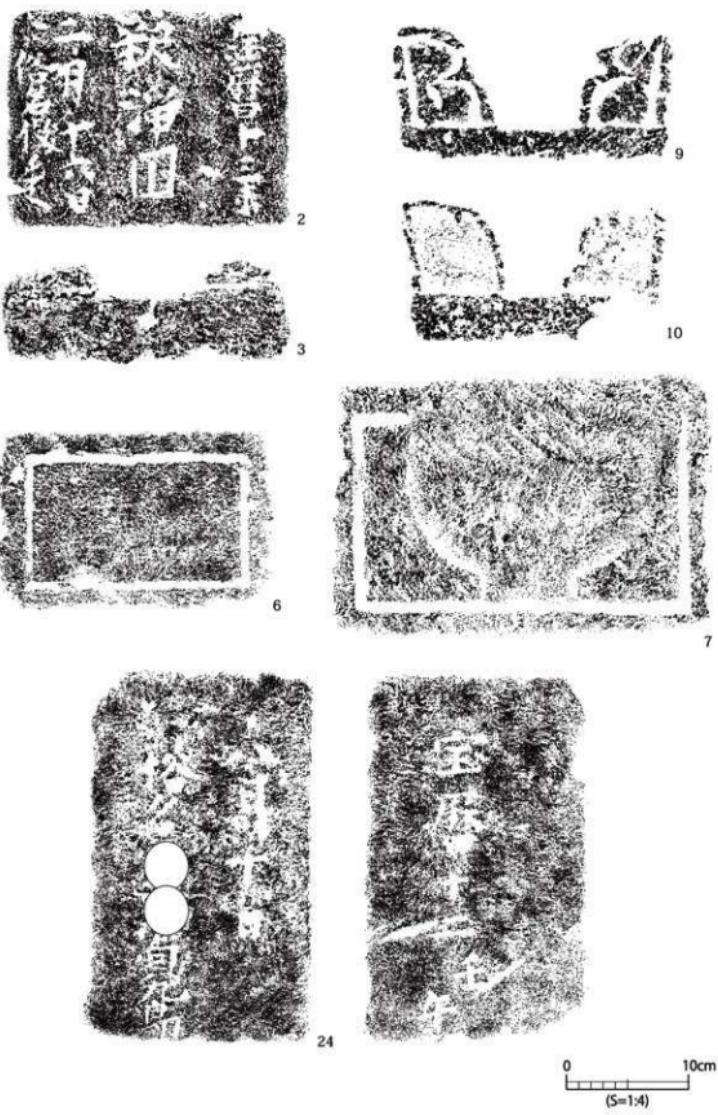
第6図 金皇寺 石造物実測図（2）



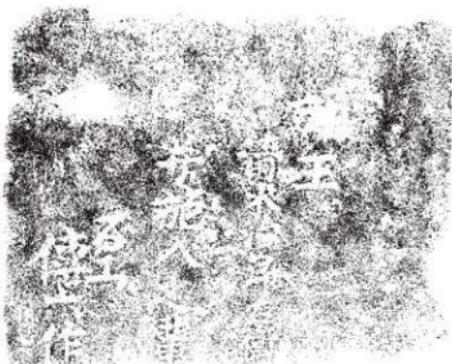
第7図 金皇寺 石造物実測図（3）



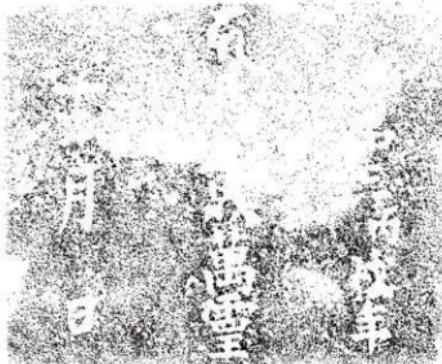
第8図 金皇寺 石造物実測図（4）



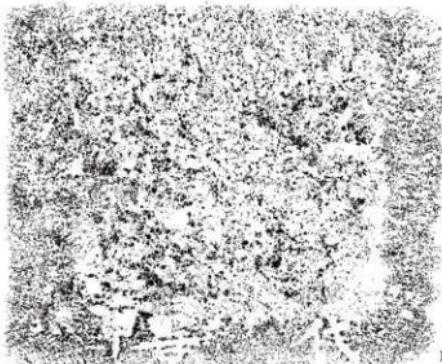
第9図 金皇寺 石造物拓影（1）



14 (左)

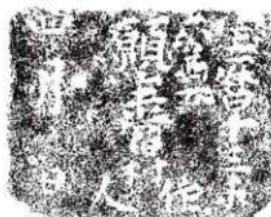


14 (正面)



14 (右) 0 10cm
(S=1:4)

第10図 金皇寺 石造物拓影 (2)



12



25



16



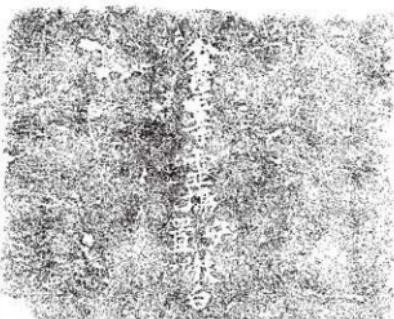
41



a (正面)



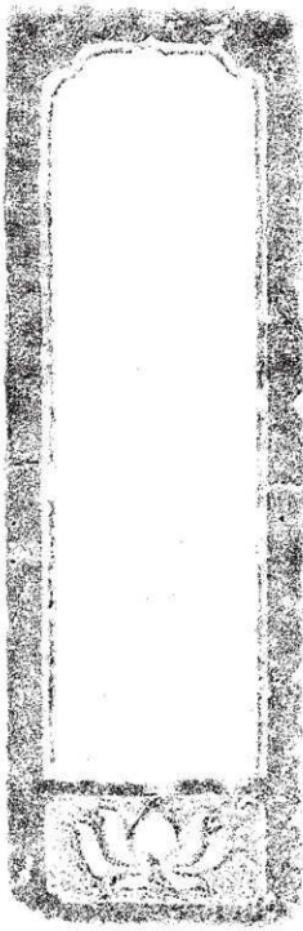
a (左)



a (右)



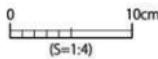
第11図 金皇寺 石造物拓影 (3)



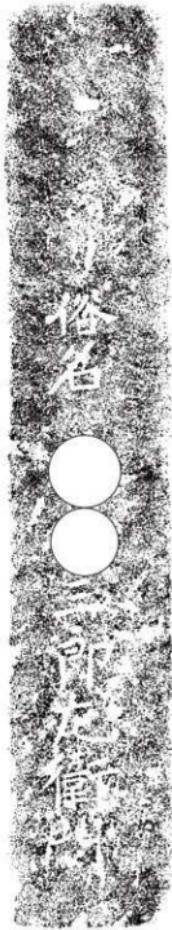
33 (正面)



33 (中)



第12図 金皇寺 石造物拓影 (4)



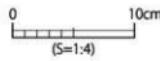
33 (右)



33 (正面)



33 (左)



第13図 金皇寺 石造物拓影 (5)

凡　例

- ・石造物一覧表には、金皇寺に所在する石造物を掲載した。
- ・石材については、中村唯史氏及び黒瀬和則氏による指導助言に基づき記載している。
- ・各石造物の規模はセンチメートル単位で掲載し、欠損している場合は残存している規模を（　）内に記載した。
- ・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面) … 右面) … と記載している。
- ・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は〔　〕で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は〔（上欠）〕、〔（下欠）〕と示した。また推定できる文字は□の後に（　）と表示した。
- ・戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
- ・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- ・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

第1表 金皇寺石積基壇と周辺の石造物一覧表

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
1	宝蓋印塔	緑色火山礫凝灰岩	基礎	22.0	(上面) 18.5 (下面) 24.8			反花座は単弁を側面に三葉、間に一葉作り出す。下面は14.0×15.5cm、深さ3.2cm彌りくぼめる。
2	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	基礎	18.3	(上面) 23.0 (下面) 23.2	(上面) 21.7	宝曆十三年 积净円 二月十六日 俗名復定	下面は17.5×15.0cm、深さ8.3cm、彌りくぼめる。
3	宝蓋印塔	白色凝灰岩	屋根	20.5	(上面) 12.2 (軒上) 24.8 (下面) 19.2	(軒上) 24.8		上4段+下2段。軒は厚さ6.0cmで外反。隕鉢文記は単弧で外反。側面は削落により不明。上面に僅4.0cm、深さ7.0cmのはぞ穴。
4	宝蓋印塔	デイサイト	相輪	(17.1)	(宝珠) 9.3 (頭花) 9.9 (九輪) 8.0			宝珠から九輪の一部。宝珠は直線的で先端が尖る。頭花は単井八葉。九輪は幅0.5cm前後の溝で区画し、尖端状。
5	宝蓋印塔	デイサイト	相輪	(16.7)	(伏鉢) 11.8			九輪の一部(天寧)からはぞみで残る。伏鉢の部位に、大きな単弁四葉+開削四葉を表現する。はぞみは円形で僅8.0cm、長さ5.5cm。
6	宝蓋印塔	デイサイト	基礎	20.2	(上面) 15.6 (下面) 23.1 (下面) 23.0	(側面) 23.4		上面に僅9.0cm、深さ2.3cmの円形の彌り込み。段足1段+反花座。反花座は中央と隅に三葉+間に開弁。側面は西面とも幅0.5cm・深さ0.2cmの溝で幅18.2×18.5cm、高さ11.5cmの輪郭を巻く。下面は13.0×14.0cm、深さ4.2cm、彌りくぼめる。
7	宝蓋印塔	デイサイト	基壇	25.4	(上面) 21.2 (側面) 31.8 (下面) 32.6	(側面) 31.6		上の幅5.7cm、高さ3.9cmを取取りし、「削型屋」様にする。側面は幅0.5~1.0cmの溝で28.0cm、高さ16.5~17.0cmの輪郭を巻く。花頭曲輪は基部の幅8.0cm、最高幅10.0cm(高さは11.5cm以上)、側面は西面とも、上端から花頭曲輪まで、表面をはついている(工具痕の跡10cm)。底面は22.0×21.0cm、深さ1.5cm彌りくぼめる。
8		白色凝灰岩	台石	15.3	48.5	36.8		右方に幅13.0cm×20.0cmの長方形のくりぬき。くりぬきの側面には低い削文跡。
9	宝蓋印塔	デイサイト	屋根	(17.8)	(上面) 10.5 (頭飾先端) 24.0 (軒上) 23.0 (下面) 15.2	(軒上) 22.3		上面を欠失。上面に円形のはぞ穴(径8.0~7.0cm、深さ5.5cm以上)。上5段+下2段の段形。高さは下1段のみ1.5cm。他の20~25cm。隕鉢文記は二段。蓋の交点は上段形の2段目あたり。側面は二段で、下辺を除き幅0.5cmの溝刷り。下面には刃7.0cm、深さ1.8cmの方形孔。
10	宝蓋印塔	デイサイト	屋根	14.6	(上面) 11.5 (頭飾先端) 22.6 (軒上) 21.3 (下面) 18.7	(軒上) 21.4		上面に円形のはぞ穴(径8.5cm、深さ4.6cm)。上4段+下1段の段形。上段形は高さ20~23cm、下段形は高さ1.4cm。隕鉢文記は単弧。隕鉢文記は二段で蓋の交点は上段形の2段目あたり。車辺に彌き彌りくぼめる。下面は11.0cm×14.5cm、深さ1.5cm彌り下げる。
11-1	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	(頭部)	(11.7)	(首部) 6.9			頭部のみ。
11-2	地蔵	緑色火山礫凝灰岩		(25.5)	(最大幅) 23.7 (下面) 22.5	14.0		坐像。頭部を欠く。合掌。正面に高さ6.0cmの頭花三葉。
11-3	地蔵か	緑色火山礫凝灰岩	(台石)	6.5	25.4	25.4		座像。正面・背面が逆に重かれている。9.0cm×3.5cm、深さ1.8cmの水槽をつくる。
12-1	地蔵	緑色火山礫凝灰岩		(25.7)	(最大幅) 23.0 (下面) 20.0	(下面) 16.5		頭部を欠く。両手で薬を持つ。正面に高さ5.5cmの蓮弁三葉。
12-2	地蔵	緑色火山礫凝灰岩		18.2	(上面幅) 22.6 (下面幅) 22.4	(上面幅) 20.8	宝曆十三年 口口 住 願主当村 人 西月日	向きが90度異なる。正位置にして因化。
12-3		緑色火山礫凝灰岩	台石	12.6	37.3	37.5		底面は縁を4.0cm残して彌り込み(深さ不明)。

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
13-1	地蔵	白色凝灰岩		46.3	(下面) 26.3	18.0		板石の正面のみ加工整形。合掌。
13-2	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	台石	11.0	34.0	33.5		上面に水受けと縁石を立。水受けは15.0×6.0cm、深さ1.7cm。前面、左右に径25cm、深さ1.0cmの穴。
14-1	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	頭部	17.8	(首部) 8.6	14.9		表面剥落。
14-2	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	脚部	44.3	(最大幅) 43.0 (下 面) 36.0	(最大) 28.3		坐像。右手欠損。左手に宝珠。下面是幅32.0cm、深さ3.0cm彌り込み。蓮座は高さ16.5cmで別作。おおむね主蓮弁六瓣と開弁となり。正面中央に開弁を配する。下面を幅24.0cm、深さ12.5cm彌り込み。
14-3	地蔵	緑色火山礫凝灰岩	台石	31.2	36.8	36.8	(正面：現在の右面) □口 (和か) 三丙亥年 △(文字) □口 (界) 真置 十月日 (左面：現在の正面) 施主 清水治郎右衛門 并掛入之輩 石工 傳六作 (右面：現在の背面) △(久) 代 △(久) □ △(久) □	三界萬靈を目的に造立。三面に鉄文。本来の向きと90度異なる。上面を面取り。上面を幅32.0cm、深さ1.0cm彌り込み。蓮座を受ける。下面を幅27.3cm、奥行28.0cm、深さ2.0cm彌り込む。
15	水盤	緑色火山礫凝灰岩		8.7	(上面) 20.5 (下面) 17.5	(上面) 13.0		逆台形。下端は剥落。水受けは15.5cm×8.5cm、深さ4.0cm。
16		白色凝灰岩		5.0	19.5	11.8		正面を仰取。中央弁と左右二翼。下一翼、扇手を斜削。下端は縁を1.5~2.0cmのこして、深さ1.6cm彌り込み。
17	地蔵	緑色火山礫凝灰岩		(18.0)	(高大) 8.9 (請花) 10.8 (下 面) 8.6	9.7		頭部と手足を欠く。背面も剥落。立像。合掌。下に開弁六瓣のからな咲花。
18	宝蓋印塔	白色凝灰岩	相輪	(13.3)	(宝篋) 11.3 (請花) 11.0 (九輪) 8.8	(請花) 10.2 (九輪) 8.8		宝珠から九輪の一部まで残る。2点接合。宝珠は正円形ではなく丸く、請花は蓮弁5葉+開弁。九輪は輪の厚さ20cm。
19		緑色火山礫凝灰岩	台石	14.0	40.5	40.0		上面は西面を9.0~10.0cmを整形上げし。中央弁21.5×20.0cmは粗い加工痕のこす (深さ1.3cm)。
20	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩		(33.0)	21.3			横倒しになった状態で埋まり、先端のみみえる。
21		緑色火山礫凝灰岩	台石	(右) 13.5 (左) 8.0	31.3	26.8		長方形の板材で、一端のみ脚をつくる。側面は粗い加工。下面是深さ60cm彌りこむ。
22	地蔵	白色凝灰岩		(38.0)	19.4	20.3		頭部を左にして横倒しになっている。頭部を欠失。板材の正面のみ整形加工し、横断面は薄鉢形。合掌。
23	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩		(19.8)	22.0			横倒しになって埋まっており、先端のみ見える。
24	円頂方柱墓標	緑色火山礫凝灰岩		33.8	18.8	18.0	(右面) 宝篋十二壬午 (左面) 八月十日 俗名○○貞九郎	正面を高さ21.0cm・幅12.0cm、深さ1.0cmの位牌形で仰取。高さ4.0cmの蓮座。中央弁+左右二翼、下左右一翼。下面是13.0cm×12.5cm、深さ10.0cmの彌り込み。
25		緑色火山礫凝灰岩	台石	(17.5)	27.5	24.5	(正面) 明和八辛卯口 傳 梅月妙香 正月十五口	下端は埋没。正面に鉄文。
26		白色凝灰岩		(3.5)	(上面) 10.0	(11.5)		不規則材の被片。
27		白色凝灰岩		(8.8)	20.5	11.0		下面は左右端を1.5cm残し彌り込み。粗い加工痕 (鉄突痕) のこす。
28		緑色火山礫凝灰岩	台石	10.8	(上面) 26.0 (下 面) 38.3			24.0台石か、二つに割れている。中空で上面幅10.0cm、下面幅28.0cmくりぬいている。
29	灯籠	緑色火山礫凝灰岩	笠	15.8	(上面) 24.0 (下 面) 42.7	(下面) 42.3		中空で上面幅12.8cm、下面幅37.5cmくりぬき。軸厚3.0cm。

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
30-1		白色凝灰岩		11.5	805	16.0		長方体の板材。30-2と組み合う。
30-2		白色凝灰岩		11.5	(250)	24.5		長方形の板材。30-1と組み合う。幅は不明。
31		緑色火山礫凝灰岩		6.8	(41.0)	(16.0)		板材。両端は欠矢。
32	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩		(40.0)	(20.7)			横倒しになって埋まっている。先端が見えない。
36	宝蓋印塔	デイサイト	基礎	(26.0)	(上面) (18.0) (側面) (23.0)	上面 (23.0)		右側1/4を二次的に削り取っている。左側は平滑に仕上げていない。上面は15.0×13.0cm、深さ3.2cmの船型彫り込みがある。反花座は中央に覆面付き単井手置き、開井ははつま。側面は船型向の溝と桿型の線が0.5cmの溝で形成されている。竪方向の溝は幅2.0~3.0cmで凸凹している。
37	宝蓋印塔	白色凝灰岩	塔身	(14.7)	18.2	17.6		上面は平滑、下面は凹凸している。
38		緑色火山礫凝灰岩	台石	(13.5)	35.0			基礎の石積に転用。
39	地藏	緑色火山礫凝灰岩						光背付き、横倒しになって埋まっている。

第2表 金皇寺地蔵堂の石造物一覧表

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
33	笠付方柱臺標	緑色火山礫凝灰岩		(77.1)	24.5	13.3	(正面) 南無阿弥陀佛 御靈秀靈 (右面) 貞享元子歲十一月六日 (左面) 常名〇三郡左衛門 (背面) 鎌山西向寺九世 願上人父也	正面を高さ61.0cm、幅160cmの位牌型に削り、幅60cmから1.0cm内側を深さ4.0cm彫り込む。その下に幅18.0cm、高さ90cmの枠を取り、中に蓮座。中央丸柱+左右2柱、下に二重。背面は中央に向かってさ2.5cm粗く彫り込む。下部に幅14.0cm、奥行8.0cm、高さ6.0cm以上のぼりを作る。ぼりは二次的に彫りされている。
34	宝蓋印塔	白色凝灰岩	相輪	(18.5)	(九輪) 9.8			上部花と九輪の一部。上部花は表面削落し、文様不明。九輪は幅0.5cmの溝で区画し、厚さ1.5~2.0cmの突状。
a	地藏	緑色火山礫凝灰岩	立像 蓮台 基盤	107.0 19.5 26.6	35.1 34.0 33.0	20.4 33.5 32.6	(正) 宝蓋六子天 羅六諸衆生 奉造立地蔵大士 往生安樂圖 六月日 (右) 金生寺靈場安 樂 (左) 口宝生庵住 來善	立像。左手宝珠
b	地藏	緑色火山礫凝灰岩	立像 蓮台 基盤	109.6 19.5 27.8	34.2 33.0 33.4	22.2 32.5 33.4		立像。左手宝珠か
c	地藏	緑色火山礫凝灰岩	立像 蓮台 基盤	96.5 20.0 24.0	24.9 30.0	17.9 30.2		立像。右手欠損。左手に宝珠
d	地藏	白色凝灰岩		52.0	34.2	13.3		坐像。合掌。側面・背面は整形していない。
e	地藏	白色凝灰岩		41.5	38.6	28.6		坐像。合掌。側面・背面は整形していない。断面杏角形。
f	地藏	白色凝灰岩		55.5	32.5	17.9		坐像。合掌。膝部を一部欠失。側面・背面は整形していない。
g	地藏	緑色火山礫凝灰岩		(27.4)	19.8	13.2		坐像。肉彫。首を欠失。左手に持物。下端に蓮座。
h	地藏	白色凝灰岩		45.1	25.6	15.0		坐像。合掌。膝を欠損。側面・背面は整形していない。
i	地藏	凝灰質砂岩		(46.5)	35.4	23.0		坐像。合掌。頭を欠損。側面・背面は整形していない。
j	地藏	白色凝灰岩		40.3	21.3	11.1		坐像。合掌。頭を欠損。側面・背面は整形していない。

第3表 金皇寺住持墓地の石造物一覧表

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
35	笠付方柱墓標	緑色火山礫凝灰岩		18.5 (標) 16.5cm (杆) 42.0	50 (杆) 300			桿は反る。むくり屋根。正面に唐破風を付け、中央に円状突起。下に羅手状の文様。軒の厚さ4.0cm。
40	宝蓋印塔	デイサイト	相輪	(16.9)	(宝珠) 12.0 (講花) 12.6			宝珠から上講花までのところ。講花は繩結付き縦井6巻に単井6葉をはさむ。
41	宝蓋印塔	デイサイト	屋根	(17.1)	(杆上) 25.3	(杆上) 25.2		上面を欠失。上面に円孔にはモ穴(径8.0cm、深さ20cm以上)、上3段+下2段の段形。上段形は高さ3.5cm、下段形は高さ20cmで倒立、隅脚起支は単脚での造り。
42	宝蓋印塔	白色凝灰岩	相輪	(19.6)	(宝珠) 11.5 (講花) 10.5 (九輪) 8.6			宝珠から九輪の一部まで残る。講花は縦井の小さな主縦井に間井をはさむ。講花と九輪の間に文様をつくる。九輪は空帝式。
43	宝蓋印塔	白色凝灰岩	相輪	(16.7)	(九輪) 10.2 (講花) 11.6			九輪と講花の一部が残る。九輪は花0.5cmの溝で区画し、輪の厚さは1.5~2.0cm、講花は単井に小さな間井(单井)をはさむ。
A	円頂方柱	緑色火山礫凝灰岩	基標 蓮台 基壇1 基壇2	51.0 14.8 15.0 ?	21.5 37.5 38.5 50.0	21.5 37.2 40.0	(正) 貞治院靈妙妙生大師 (右) 大正九年七月十五日 (左) 俗名〇〇〇〇安 行三十九才 良道実母	水受
B	平頂方柱	花崗岩	基標 基壇1 基壇2	45.6 12.8 (5.5)	22.0 33.7 46.0	21.5 33.3 ?	(正) 黄帝院靈妙天祥雲大師 (右) 平成十七年十月五日 (左) 俗名〇〇〇〇 行年八十二才	
C	平頂方柱	コゴロ石 (宅野) か	基標 基壇1 基壇2	48.1 18.2 (8.5)	20.0 18.2 39.3	18.2 19.2 ?	(正) 黄帝院靈妙明良大師 (右) 昭和廿一年一月二日卒 (左) 俗名〇〇〇〇 享年七十三才	
D	無縫塔か	緑色火山礫凝灰岩	塔身 基礎 基壇1 基壇2	(43.0) 23.9 15.6 12.5	21.9 27.3 43.2 55.0	21.9 27.3 43.2 54.5	(正) 五十団口 ○○○四男 ○○○ 生年九才 (背) 明治二十一年 八月一日没 十六世 薄口弟子	水受。塔身は背後に横倒し。基壇上には被片のみ。基壇2は前後2枚の板石で構成。白色凝灰岩を使用。
E	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩	塔身 蓮台 基礎 基壇1 基壇2	52.5 15.8 27.2 16.6 (11.2)	25.4 31.3 33.4 49.5 65.0	25.4 31.3 33.4 49.2 64.4	(正) 十五世 得與上人 中興 (右) 明治三十五年 七月一日円寂 (左) 十六世 道口 能登口達	水受。塔身は天地逆で右側に倒れている。基壇2は前後2枚の板石で構成。
F	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩	塔身 基礎 基壇1 基壇2 基壇3	53.0 30.0 21.5 20.0 (13.0)	27.7 31.8 51.8 70.0 115.0	27.7 31.8 51.0 88.8 114.0	(塔身) キリーカ 南無阿弥陀佛 (正) 寛政四口 口山歷上人墓 士口七月 (左) 富山十二世 口阿 立之	水受。基壇2・3は前後2枚の板石で構成。
G	無縫塔	コゴロ石 (宅野) か	塔身 蓮台 基礎 基壇1 基壇2	53.3 12.8 21.8 20.0 19.5	21.2 23.0 32.0 47.4 69.7	21.2 22.8 36.3 45.8 70.2	(塔身) キリーカ 法連社僧正蓮譽上人 (正) 第十七世 隆信大和尚 (右) 昭和四十八年 六月三十日	水受。花立。基礎2は前面に花立の穴2つ。基壇2は3枚の板石で構成。
H	無縫塔	コゴロ石 (宅野) か	塔身 基礎 基壇1 基壇2	60.5 15.5 25.0 16.3 (9.0)	26.2 34.4 36.7 49.2 61.3	26.2 34.4 37.0 49.8 61.0	(塔身) 蓮蓬社禪惟正顕譽上人 (正) 第十六世鶴淨大和尚 (右) 昭和二十六年三月三十日寂	水受花立。基壇2は前後2枚の板石で構成。

番号	形式	石材	部位	高	幅	奥行	銘文	特徴など
I	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩	塔身 基礎 基壇	48.0 13.4 (11.8)	22.6 17.5 39.3	22.6 17.3 ?	(塔身) ア 静謐澹月智主法尼 (右) 当山在勅廿六年 行年六十三才 口實建之 (左) 明治四十年 八月二十六日	
J	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩	塔身 蓬台 基礎 基壇	52.5 14.3 24.7 (4.0)	22.3 27.8 17.5 31.0 52.0	22.3 27.8 31.0 ?	(正) ア 温馨正唯良通法子 (右) ○○○○夏 行年二十才 難争次男 (左) 昭和七年 十月十二日	
K	円頂方柱	緑色火山礫凝灰岩	基壇 基礎 基壇	41.6 12.5 (8.5)	19.0 31.0 (41.0)	14.3 ? ?	(正) カ 便次玄夫妻子 (造座) (右) 大正元年九月一日 (左) 難争其○○○夏 二年三ヶ月	基礎は水受けをもつ
L	平頂方形	緑色火山礫凝灰岩	臺標 基壇	24.0 (4.0)	21.8 33.7	15.2 33.7	(正) 蓬芳孫虎 直覺孫虎 (右) 明治四十二年 十月酉日 (左) 明治四十三年 四月一日	
M		緑色火山礫凝灰岩	基壇	20.2	23.3	18.5	(正) 淳眞翁童女 (右) 俗名○○○ 富才 難曾建之 (左) 明治三十八年 十月五日没	上にQがのる
N	無縫塔	緑色火山礫凝灰岩	塔身 基礎 基壇 1 基壇 2	45.8 23.5 12.7 10.8	22.3 25.0 37.7 52.7	22.3 24.7 38.3 ?		基壇1は水受けをもつ。基壇2は左右2枚の板石で構成。
O	灯籠	凝灰質砂岩 (朱待石)	笠 火袋 中台 半 基壇	25.8 22.0 25.4 12.4 50.5 21.5	21.2 53.0 29.2 39.8 23.1 44.6		(正) 奉納 大森町○○正五郎 (背) 昭和十年三月	
P	灯籠	凝灰質砂岩 (朱待石)	笠 火袋 中台 半 基壇	28.7 22.3 24.6 11.0 43.6	20.7 52.8 28.4 40.2 23.2 22.2		(正) 奉納 大森町○○正五郎 (背) 昭和十年三月	
Q	地藏	緑色火山礫凝灰岩	光背 立佛 蓮座	29.2 23.6 3.3	15.4 7.4 14.8	4.7 3.5 ?		
R	地藏	緑色火山礫凝灰岩		30.0	19.8	14.0		

写 真 図 版



金皇寺本堂



薬師堂

図版 2



地蔵堂と住持及び関係者墓地



石積基壇から住持及び関係者墓地を望む



薬師堂裏 石造物散布状況



住持及び関係者墓地 (1)



住持及び関係者墓地 (2)

図版 4



金皇寺 石造物 (1)



10



37



6・7



6・7



36



20



23



32

金皇寺石造物（2）

図版 6



金皇寺石造物（3）

図版 7



8



19



31



21



16



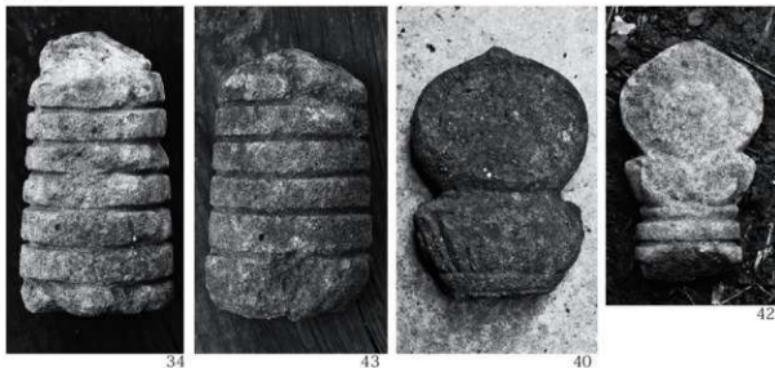
27



26

金皇寺石造物（4）

図版 8



金皇寺石造物（5）



F



地蔵堂石造物設置状況



地蔵菩薩 (c)



地蔵菩薩 (a・b・c)



地蔵堂石造物 (d・e・f・33・34・g・h・i・j)

図版 10



地藏菩薩 (c)



地藏菩薩 (a)

金皇寺石造物 (7)



金皇寺石造物調査状況等

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ				
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書				
副書名	保国山金皇寺（仁摩町大国）				
卷次					
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書				
シリーズ番号	20				
編執筆者	間野大丞・伊藤徳広・伊藤大貴				
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会				
所在地	〒690-8502 島根県松江市殿町1番地 TEL0852-22-5642 〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 TEL0854-82-1600				
発行機関	島根県教育委員会				
発行年月日	2021年3月				
名称	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査年月日
金皇寺	島根県大田市 仁摩町大国	32205	35.134150	132.422783	2020年5月 ～ 2020年12月
調査面積	-				
調査原因	石見銀山遺跡総合調査				
名称	種別	主な時代	主な遺構	石造物	特記事項
金皇寺	墓地	戦国時代 ～ 近代	基壇 地蔵堂	組合せ宝篋印塔、円頂方柱型墓標、平頂方柱型墓標、笠付方柱型墓標、地蔵菩薩、無縫塔、灯籠、形式不明の部材	

石見銀山遺跡石造物調査報告書20

— 保国山金皇帝（仁摩町大國）—

令和3（2021）年3月

編 集 島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町1番地／大田市大田町大田口1111番地

発 行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

U R L <http://www.pref.shimane.lg.jp/life/bunka/bunkazai/ginza/>
印 刷 有限会社 松陽印刷所
